

ミステリ読書案内

2024. 9. 30 発行元

第607号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

渡辺優「私雨邸の殺人に関する各人の視点」

毎年夏に開催している大学ミステリ研のOB会で、今回「犯人当てゼミ」の本に使ったのが渡辺優の『私雨邸の殺人に関する各人の視点』である。昨年の四月に双葉社から出た本。あまり話題にも上がらなかった本だが。

渡辺優という作家は…

渡辺優という作家はすばる新人賞でスタートした若い作家のようである。本作は『小説推理』に連載したものだが、ミステリ作品は書き始めたばかりの印象だ。作者が持っている「ミステリとはこういうもの」のイメージを形にしたものどは意気込みを感じることができるけれども、犯人を推理するための手掛かりをまんべんなく配置できているかという点、その点はまだまだの気がする。

登場人物の誰でもが疑わしく、誰でもが犯人になってもおかしくない描き方で、最後の決め手も納得いくような…いかないような…。

私雨邸というクローズドサークル

物語は私雨邸に11人の人物が集められ、嵐が来て道路が寸断され、通信手段も失うというクローズドサークルで事件が起こる設定。巻頭に邸内の見取り図も提示され、いかにもコチコチの「謎解き」スタイル

である。邸の主である雨目石昭吉という大会社の名誉会長が夕食の時間帯に一人で自室にいて、ガラスのナイフで刺殺される。多くの人達はダイニングにいる時間であり、わずかながら人の出入りが確認されている状況。部屋には鍵が掛けられていた。密室であり、ダイニングメッセージまで残されているという念の入れよう。

集まった登場人物は家族以外は皆初対面のような人達ばかりで、なおかつ何を考えているかよくわからない風に描かれている。

「視点ABC」の効果は…

本書のひとつの特徴になっているのは、題名にも示されているように「視点」が次々ローテーションしていくこと。Aは飛び入り参加の大学生・二宮。ミステリ研所属で、推理を楽しむが名探偵では全くない。Bは地元の雑誌記者で取材に来ていた牧。Cは昭吉の孫で無職のチャラ男の梗介。

三人とも常識外れの部分が感じ

「犯人当てミステリ」

毎年、犯人当てのゼミ本に何を使うのかで頭を悩ませる。エラリー・クイーンの『国名シリーズ』のような「読者への挑戦」が挿入されているような手掛かりがきちんと配置されている作品を選び出すのは大変なのだ。来年は倉知淳の作品になりそうかどうかのところまでは話し合ったのだが…。ほとんどの参加者が未読で、なおかつ手に入りやすい本となると…。

られる。文そのものは皆同じように書かれていて、読んでいる途中で「これ誰の視点だっけ」と見直すことが度々必要になってしまう。視点を分けたことが効果的に働いているかと言えば疑問が残る。

「犯人当て」は全員不正解

210ページまで読んで犯人を推理する試み。ゼミ形式で。10人以上で2時間近く話し合ったけれども、誰も真犯人にたどり着けなかった。こんなことも珍しい。多くの本格ミステリでは、伏線、手掛かりを拾っていくと、正解に近づけるものなのだが…。

ということで、今年は不完全燃焼で終わった。動機もわかったようなわからなかったような…。

深水黎一郎「真贋」

5月に星海社 FICCTIONS から出た本。この星海社 FICCTIONS は数年前からスタートしたシリーズで、大傑作というほどの作品は含まれていないが、マニアの気を引くミステリを発行している。はやみねかおるとか佐藤友哉の新装版とか新しい作家の「本格もの」作品を出している。ややライト系の路線とも言える。小出版社の努力に感謝。本のしおりの幅が広いのが特徴。

本書は深水黎一郎の美術ミステリ。警視庁に新設された美術犯罪課。そこに所属する刑事・森越歩未の視点で描かれている。名家・鷺ノ宮家が代替わりして、相続した鷺ノ宮コレクションに脱税疑惑が持ち上がり、作品の真贋が問題となる事件が持ち上がった。新当主の公晴が鑑定にかけたところほとんどの作品が贋作であるとの結果が示された。すると評価額はゼロに近くなり税金はかからない…。先代の公紀がオークションで買い入れた時から贋作だったのだろうか…。そしてまた地下の保管庫に嚴重に収納されていた一枚の日本画がニセモノにすり替わっていた。歩未は美術犯罪課の著外アドバイザーの芸術探偵・神泉寺瞬一郎と相談して…。画家の名前が次々出てきて、時々筋道から離れた美術談義が展開される。私のように美術好きにとっては面白い話。デューラーの自画像、モネの『積み藁』と言われれば絵そのものが思い浮かぶし、ルノアール、ユトリロ、コロドー…と続くと本物を見たみたいと思ってしまう。謎解きは妥当なところに落ち着いている。